

演題名：犬の僧房弁閉鎖不全症にみられた血漿 L-カルニチンの上昇
発表者氏名：○大池三千男
発表者所属：おおいけ動物病院・帯広

1.はじめに：昨今、L-カルニチンの脂肪酸代謝における重要性が注目されているが、L-カルニチン欠乏は犬の拡張型心筋症の原因の一つとされている。演者は平成 14 年度本学会において、臨床的に虚血性心疾患と診断し、病理解剖によって急性心筋壊死を確認した犬が、高 L-カルニチン血症を呈していたことを報告した。また、平成 15 年度本学会では、肥大型心筋症から完全心ブロックをおこした心筋虚血状態の猫においても、血漿 L-カルニチンの上昇がみられた事を報告した。今回、犬の僧房弁閉鎖不全症（MR）においても血漿 L-カルニチンの上昇がみられたので報告する。

2. 症例：症例は MR の犬で軽症から重症であった 11 例。犬の血漿 L-カルニチンの正常値は $12\text{--}40 \mu\text{mol/l}$ とされている。今回の症例を International Small Animal Cardiac Health Council (ISACHC) の分類に照らしてみると、分類 I の無症候性の症例は血漿 L-カルニチン値は正常値の 40 以下であった。分類 II の軽度～中等度の症例は、正常範囲から正常値を超えた値もみられた。分類 III の進行した心不全の症例はすべて正常値以上であった。

IIIb の症例 11 は、血漿 L-カルニチンは、 $754.0 \mu\text{mol/l}$ と最大値を示し、トロポニン T も 0.87ng/ml と高値を示した。症例は腎不全も併発しており、安樂死となったが、心筋障害が著しく激しい事が推察された。

肺水腫で死亡した IIIb の症例 10 の血漿 L-カルニチンも、 $92.9 \mu\text{mol/l}$ と高値を示した。心臓発作を起こした IIIb の症例 9 も、 $86.2 \mu\text{mol/l}$ と高値であった。また、初診の肺水腫時に血漿 L-カルニチンが $57.4 \mu\text{mol/l}$ と高値であった症例 8 は、治療による一般状態の安定時には、血漿 L-カルニチンは、 $38.4 \mu\text{mol/l}$ と正常値に低下していた。

以上の様に、ISACHC の分類で重症度の高い程血漿 L-カルニチン値が高い傾向を示した。

4. 考察：過去、犬と猫において、心筋虚血時に血漿 L-カルニチンが上昇する事を報告した。これは、心筋障害による心筋細胞からの流出と考えられる。今回、MR の症例においても、ISACHC の分類において重症度の高い程、血漿 L-カルニチンが高値を示す傾向を示した。この事は、MR の犬における心筋障害の程度を反映しているものと考えられた。血漿 L-カルニチン値は、心筋障害の程度によって増加する事が示唆された。